

## 分水嶺としての『ベルナウ時間意識草稿』

### —意識流の自己構成と意識の受動性及び無意識に関する問題—

和田 渡

wwataru1224@yahoo.co.jp

ベルナウにおける短期間の集中的な思索の成果である時間意識草稿は、フッサールの時間意識の現象学の展開のなかに位置づけてみる時、そこに何か全く新しい洞察が見出されるというものではない。したがって、この草稿は、それを期待して読む者には、失望しか与えないかもしれない<sup>1</sup>。この草稿は、特に1905年頃から繰り返して考察された時間意識に関する諸問題の再考、練り上げなおしに尽きると言ってよいであろう。周知のように、時間客観の構成、把持と予持、印象、想起と想像といった時間意識に関連する問題群は、フッサールが幾度となく反省し続けたものである。そうした反省の絶え間ない努力によって、時間意識の諸相が徐々に開示されていったことは疑いえない。フッサールが当初から腐心したのは、自分の意識において生起する出来事を細大漏らさず記述することであり、それは、フィンクがいみじくも述べた「意識の生体解剖」<sup>2</sup>の試みであった。意識の生体解剖とは、言い換えれば、「意識の生動性」に反省のメスを加えることに他ならない。この試みは、『内的時間意識の現象学』から『ベルナウ時間意識草稿』を経てC草稿に至るまで、一貫して維持されている。しかし、その過程を検討して注目すべき点は、フッサールの反省の視線の方向が実に多様な方向に向けられており、それに応じて、用いられる用語にも微妙な変化が現れ、記述される対象にも広がり認められるということである。また、同じ事態が異なる術語で表現されることも頻繁に生じてくるということである。そのことは、たとえば、初期と中期における、「原印象」と「原現示」、「流れ」と「過程」といった用語の使用頻度を比較すれば直ちに明らかになるであろう。また、意識の流れに関する多様な言い回しの増大の内にも、記述内容の広がり的一端が認められるであろう。しかし、それ以上に注目すべき点は、初期から一貫して発生的観点からの記述がなされている点である。発生的現象学の展開については、『イデーⅡ』から『ベルナウ時間意識草稿』を経て、『受動的総合的分析』さらにC草稿への繋がりに焦点を当てて論じられることが多いが<sup>3</sup>、意識の歴史性、

<sup>1</sup> ザハヴィは、『ベルナウ時間意識草稿』に第10巻よりも前進した内容を期待する者は幻滅せざるをえないだろうと述べて、この草稿に関する懐疑的な見解を示している (Cf. Dan Zahvi, *Time and Consciousness in the bernau Manuscripts*, *Husserl Studies* 20(2004), p.106.)。

<sup>2</sup> Eugen Fink, *Nähe und Distanz*, Alber 1976, S.219.

<sup>3</sup> 『イデーⅡ』と発生的現象学の展開を結びつけて論じたものとしては次のものがある。山口一郎「発生的現象学からみた構成の問題」『フッサール研究』創刊号(2003), 113-123頁。榎原哲也『『イデーⅡ』への一視点—残された未完草稿からのアプローチ』『現象学年報』19(2003), 27-37頁。

意識の経過(出現と後退、消滅)に関する反省を中核とする記述を発生的現象学の特徴の一つと見なすとすれば、既に『内的時間意識の現象学』にはその特徴を見て取ることができる。それは『ベルナウ時間意識草稿』にも顕著に認められるものである。両者に共通するのは、意識の発生様態を丹念に反省し、記述することであり、それを通じて意識の自発的な自己構成、自己現出を強調している点である。他方で、両者の違いを二点だけ指摘すれば、第一は、『ベルナウ時間意識草稿』では、『内的時間意識の現象学』では記述されていなかった「流れの意識」が意識流の自己構成と関連づけて考察されている点である。第二は、『内的時間意識の現象学』ではほとんど反省されなかった自我の問題が発生的観点から考察される点である。自我は、意識流の根源的自己構成との関連では、その受動的側面が反省され他方で、作用を遂行する能動的自我の働きも強調され、それに応じて、それまで強調されていた意識流の自己構成、自己現出という場面と並んで、意識の受動的な経過がフッサールの関心事になってくる。意識の受動的な経過とは、それが自我には知られない仕方で生起するという点である。この問題と関連して指摘しなければならないのは、自我の意識できない出来事が無意識的な次元として把握されるということである。それによって、意識の経過に関する記述の仕方にも変化が生じてくる。その後、1920年代になると、意識の受動性の問題は『受動的総合の分析』において詳細に論じられ、『ベルナウ時間意識草稿』で顕著になった発生的自我論は、C草稿で自我の自己時間化、自己構成の問題へと継承されていくものである。その意味で、『ベルナウ時間意識草稿』には、意識の能動性と意識の受動性への二重の視点が存在するのであり、その視点に支えられた記述が、それ以後の反省に継承されて、受動性の分析と自我論の展開へと結びつくのである。

そこで、以下の考察においては、最初に第一に、『内的時間意識の現象学』における意識の自発性に関する発生的分析について検討し、次に、その分析が『ベルナウ時間意識草稿』において継承される側面と、自我論の登場に伴って意識の受動性論へと分岐し、無意識の次元が問題として浮上する側面とに注目し、『ベルナウ時間意識草稿』の特徴の一端を示してみたい。

## 1 『内的時間意識の現象学』における

### 意識の自発性の問題とその発生的分析

すでに大まかな見取り図として述べたように、『ベルナウ時間意識草稿』や『受動的総合の分析』において自我の問題を反省の視野に収めたフッサールは、自我の能動性あるいは能動的志向性との対比で、意識の生成を受動性あるいは受動的志向性として捉えていくことになるが、自我の問題抜きで記述される『内的時間意識の現象学』においては、意識の働きのなかでも、とりわけ意識が比類ない仕方で自己を構成する側面に反省の視線が注がれている。この側面は、フッサールが「意識の自発性」(Hua X,100)<sup>4</sup>と呼ぶものである。フッサールによれば、この自発性は、「根

<sup>4</sup> 以下、フッサール全集からの引用は、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で示す。

源的に発生したものを成長させ、発展させる」(Hua X,100)という特徴を持つ。印象は、「意識とは無関係に生成し、感受されたものである」(Hua X, 100)が、意識の自発性は、一度感受された「新しいもの」を「成長させる」のである。この働きは、意識が流れの中で自らを構成する、意識の自発的な働きであり、自我の関与なしに、それ自身で生成するものである。意識は自らの流れのなかで受容したものを、自我の知りえない仕方ですべて育てることを止めない。意識がそれ自身で自らの流れを構成する場面は、不断に自己を維持し続ける生命のありようを連想させるものである。たとえば、特定のレストランに行き、食べ物を選択するのはわれわれであるとしても、食道を経て胃におさまったものが消化され、排泄にいたるプロセスは、生命の自発的な働きに負っている。それと同様なことが意識についても言えるのであり、おそらく、フッサール自身も、意識と生命を重ね合わせて見ているのである。そのことは次の表現に見て取れる。「意識の生命は絶えず流れており、単に個々の分枝が連鎖的に繋ぎあわされてはいないがゆえに、想起も絶えず流れている。むしろすべての新しいものは古いものに遡及的に作用し、そこでは新しいものの前進的志向が充実され、かつ規定されるのである……」(Hua X, 54)。ここで示されているように、意識生命の次元では、意識において生起するあらゆる出来事が相互に影響を及ぼしあい、したがって、現在と過去、未来の間にはいささかの切れ目もなく、それらは不断に相互に重なり合い、反応しあっている。フッサールの狙いは、そうした重なり合いの現象の記述を通じて、意識が流れの内で比類ない仕方ですべて自己を構成する様態を把握することにある。

そうした現象の記述に際して注目すべきは、「終着する」という動詞である<sup>5</sup>。メロディーの知覚の場合を例にして、フッサールは述べている。「ここではいろいろな統握が連続的に移行しあい、それらは今を構成する統握の中に終着するのである」(Hua X, 40)。この動詞が意味するのは、現在から把持を経て過去化する現象が新たな今に不断に立ち戻ってくる様態である。現在は過去化する現象の起点であり、同時に終着点でもあり、過去が常にあらたな現在に蘇ることによって、新たな現在は不断に「成長する」ことを止めないのである。「過去連続体は今をその終着点としており、しかも絶えず先行していたものが次第に深く過去の連続体の内へ押しやられるにつれて、絶え間なく次々と新しい今の内に終着するのである」(Hua X, 69)。この表現によって示されている、現在から過去把持的変様を経て過去へ沈下するものが、新たな現在に回帰する現象は、自我の関与し得ない次元で、意識がそれ自身を構成するものである。フッサールの別の表現を借りれば、現在には「顕在的な今へ注ぎ込む種々の想起の系列」(Hua X,105)が伴い、「想起の諸志向は知覚の中に終着するのである」(Hua X, 106)。今から今へと向かう知覚のそのつどの場面には、想起の系列が不断に流れ込んでおり、現在は過去と一つになって生成することをやめない。「現在は常に過去から生まれる、もちろん一定の過去からは一定の現在が生まれる」(Hua X,106)という言い方のうちにも、現在の出来事に及ぼす過去の影響力が

---

<sup>5</sup> この動詞は、『ベルナウ時間意識草稿』でも何度か用いられているが、ここでは論及しない (Vgl. Hua XXXIII, 20f., 24, 34, 231, 328, 376)。

強調されているが、忘れてならないのは、想起の系列の現在への流れ込みや、現在に新たな展開をもたらす過去の影響は、意識の流れの中で意識自らが産出するものだという事である。フッサールがこの側面に、意識の根源的自発性を認めていたことは、先に述べたとおりである。彼はまた、意識の根源的な自発性が働く次元を「絶対的主観性」(Hua X, 74)と名づけ、超越論的主観性に先行し、それを可能にするものとして捉えていたのである。

こうした意識の自発性は、意識の流れの特異性、特に流れが自らを統一化する流れの諸相と関連づけられる。周知のように、フッサールはしばしば意識流の統一をどのように知りうるかを問題にした。フッサールの下したひとつの結論は、「唯一の意識流の内に、一つの同じ事象の両面のように、分かちがたく一つになって、お互いに要求しあう二つの志向性が相互に絡み合っている」(Hua X, 83)というものであった。ここで語られる志向性は、言うまでもなく、自我の能動的な作用志向性を意味するものではない。それは、意識流の中で流れを統一したものにする働きに他ならず、その働きを促しているのが、意識の根源的な自発性である。それこそが、「流れの自己現出」(Hua X, 83)を可能にしている。さきにも述べた、「根源的に発生したものを成長させ、発展させる」(Hua X, 100)働きとしての意識の根源的な自発性が常に働くがゆえに、「流れはそれ自身のうちで自らを現象として構成する」(Hua X, 83)ことが可能になる。

以上で述べたのは、『内的時間意識の現象学』において強調されている意識流の自発性と生動性に関する考察の一面にすぎないが、この問題は『ベルナウ時間意識草稿』においても更に反省されている。その特徴は、さきにも述べたように、後者においては、前者で強調された意識の自発性の側面が引き続き反省の対象にされる反面で、意識を受動性の次元で捉えようとする傾向も認められるということである。そこで、まず『ベルナウ時間意識草稿』における意識の自発性の問題を次に検討してみたい。

## 2 『ベルナウ時間意識草稿』における

### 流れの自己意識(意識の自発性)と自己構成の問題

「流れがそれ自身のうちで自らを現象として構成する」(Hua X, 83)という流れの自己構成の問題とは、言い換えれば、「いかにして流れがそれ自身のうちで自らの流れを統一化しているのか」という問題である。この問題は、『イデー I』の第81節で触れられるにとどめられた「ある究極の真に絶対的なもの」(Hua III, 198)に関係するが、こうした意識流の統一を可能にするものに関する問題は、『ベルナウ時間意識草稿』でも、「流れの自己現出」と関連づけられている。「意識は、それ自身が流れとして現出する意識の流れである」(Hua XXXIII, 44)。他方で、この草稿において特徴的な点は、意識流の自己現出とその統一の様態が、「流れの自己意識」論として展開されていることである。流れの自己意識とは、意識の流れが自らの流れの中で、自らを流れとして意識している事態を指している。フッサールは、端的に「流れの存在は自己自身の知覚である」(Hua XXXIII, 44)とも述べているが、しかし、こ

れはどのような事態であろうか。意識流が、フッサールの言うように「永遠のヘラクレス的流れ」あるいは「無限のプロセス」(Hua XXXIII, 29)<sup>6</sup>であるとすれば、流れの全体が意識されることはありえない。とすれば、流れは自らの流れの一部を意識するということであろうか。しかし、流れが不断の変様プロセスである以上、その一部を固定化して意識することも不可能であろう。とすれば、流れの自己意識は、特定の対象へと向かうことなく、それでいて意識するという性格を失わないような意識ということになる。その場合に意識されるのは何か。対象を持たない意識があるのか。この問題を考察するに際して、フッサールは、理念的にはすべてを知る“神的な”意識を考えることができ、“有限な”意識もすべてを知っており、その志向性は意識の全過去と全未来を、部分的には明晰に、その他は暗さの内で包括し、その暗さは明晰になり、再想起されうると述べる(Vgl. Hua XXXIII, 46)。フッサールはまた、あらゆる現実の意識の契機は、それ自身のうちに二重の地平をもち、意識は前方と後方に向かうとも述べて、意識の二方向への伸び広がりを指摘している(Vgl. Hua XXXIII, 46)。つまり、フッサールによれば、特定の対象を持たない意識とは、あらゆるものを意識する意識なのである。「すべてを知る意識」という言い方で強調されているのは、意識の流れのすべての位相を意識の志向性が貫いており、それによってあらゆる位相は相互に浸透し、絡み合っているだけでなく、その浸透そのものの内に「流れの絶えざる意識」(Hua XXXIII, 47)が働いているということである。その意識が流れの諸相に及んでいる側面が、「すべてを知る意識」という言い方によって示されていると考えられる。フッサールによれば、現に生起する出来事は意識の流れの全過去ならびに全未来と一つに結びついており、意識はそのことに気づいているのである。それゆえに、意識はその知を通じて、自らの多様な流れを志向的に統一化している。その特殊な知の働きがなければ、未来へ向かう流れ、現在から過去へ向かう流れ、過去から現在へ向かう流れといった多種多様な流れは、言わば濁流と化して、荒れ狂い、流れる方向を見失ってしまうであろう。しかしながら、意識の流れには、おのれの多様な流れの諸相を一つにまとめるような、特殊な知の志向的な働きが貫いているのである。言うまでもなく、ここで述べられている志向性は、先にも述べたように、自我の作用志向性ではなく、意識が自らの流れの中で自らを意識的に構成する働きに他ならない。言い換えれば、「”永遠の“プロセス、間断なきプロセス」(Hua XXXIII, 31)は、意識流の自己意識的な構成のプロセスであり、その志向的な統一化のプロセスなのである。

『ベルナウ時間意識草稿』における記述の中で比類ない点の一つは、フッサールがそうしたプロセスを、先に触れたように、「絶対的主観性」(Hua X, 74)あるいは「ある究極の真に絶対的なもの」(Hua III, 198)の次元と見なし、その反省に専念していることである。「絶対的」あるいは「究極的」という形容詞は、「そこを起源とする」という意味で「根源的」という形容詞と同義と見なしてよい。根源的次元とは、『イデ

<sup>6</sup> 「無限な」という形容詞は、プロセスについてだけではなく、時間や過去についても用いられている (Vgl. Hua XXXIII, 297, 368)。また、「永遠の」という形容詞がプロセスや、流れについても用いられている(Vgl. Hua, 31, 135)。フッサールにおける「無限性、永遠性」の概念については、機会を改めて検討してみたい。

ーン I 』において、「体験は、現象学的時間の中で繰り広げられた一つの統一として、連続的で「根源的な」時間意識において構成される」(Hua III, 291f.)と述べられていた「時間意識」を指している。しかし、『イデーオン I 』では、根源的な時間意識の統一が諸体験を包括する統一であると述べられるにとどまり、根源的な時間意識がどのように生起するかについては断片的にしか語られていない。『ベルナウ時間意識草稿』では、その問題が再度反省されるのである。それを通じて、とりわけ意識流のダイナミックな働きが浮き彫りにされる<sup>7</sup>。意識流のダイナミズムとは、流れの現在において生起する出来事が、流れ去った過去と現在に至る未来との相互連関のもとで、共鳴しあいながら、生成するということである。言い換えれば、ある意識は他の意識と結びつきつつ、不断に意識のあり方を変えていくのである。こうした場面において、意識と意識の結びつき方を決めるのは、流れの内にある意識そのもの、あるいはその意識がもつ特有の知の働きである。意識はその自在な働きを通じて、おのれの流れを構成し続けているのである。そうした意識流における出来事が相互に影響を及ぼしあいながら、それを通じて、不断に自己を構成するプロセスは、すでに1900年代から反省されてはいる。その具体例として、現在の知覚に想起の系列が流れ込む現象については1で述べたとおりである。しかし、『ベルナウ時間意識草稿』では、知覚のみならず、予持や把持の間の相互影響についても執拗な反省がなされる<sup>8</sup>。そうした作用間の相互浸透、相互影響の現象そのものが意識流の統一を可能にする意識流の自己構成のプロセスとして把握されてもいるのである。

フッサールは、そうした現象に注目しながら、意識流の根源的な自己構成のプロセスを、意識の自発的の生起に過程とみなしている。それはたびたび「原プロセス」<sup>9</sup>と名づけられている。「こうした原プロセスは、内在的時間の諸対象と同様な仕方ではもはや構成されない」(Hua XXXIII, 122f.)。原プロセスとは、二度と構成されることのない、意識流の自己構成的なプロセスに他ならないのである。フッサールはそれを、『内的時間意識の現象学』の場合よりもはるかに多くと生命と結びつけている。

<sup>7</sup> 意識のダイナミズムについては、既に以下の論文や著作で言及されているが、いずれにおいてもダイナミズムの指摘にとどまり、立ち入った検討はなされていない。(Cf. M.J.Larrabee, *Inside Time-consciousness: Diagramming the Flux*, *Husserl Studies* 10(1994), p.181f. James R.Mensch, *Husserl's Concept of the Future*, *Husserl Studies* 16(1999), p.46. Toine Kortooms, *Phenomenology of Time Edmund Husserl's Analysis of Time-Consciousness*, Kluwer Academic Publishers 2002, p.163.)

<sup>8</sup> 『ベルナウ時間意識草稿』における予持と把持の協働に焦点を当てたものに次のものがある。ディーター・ローマー、浜渦辰二訳「フッサールのベルナウ草稿につながる予持の分析—予持は何を“予持”するのか—」、『フッサール研究』第2号(2004),191~206頁。なお本稿と直接関連しないが、フッサールの予持概念を最終的に相互主観性の次元に結びつけようとするものに次のものがある (Cf. Lanei Rodemeyer, *Developments in the Theory of Time-Consciousness An Analysis of Protention*, *The New Husserl* ed. Donn Welton, Indiana University Press 2003, pp.125-154.)。

<sup>9</sup> リシールは、『ベルナウ時間意識草稿』のテキストの11と12に関する批判的コメントの中で、「原プロセス」ならびにその出来事を、把持、予持、把持的変様などと関連づけて詳細に論じている。それは、予持、原現示、把持が相互に絡み合いながら生成する出来事としての現在に関するフッサールの反省を批判的に検討したものとして、特筆すべきものである (Cf. Marc Richir, *Phantasia, imagination, affectivité*, Millon 2004, pp.468-482.)。

「意識は生命である」(Hua XXXIII, 69) は、フッサールの揺るがぬ確信である。言うまでもなく、生命はわれわれが支配できるものではなく、生命こそがわれわれの存在と活動を支える究極の基盤である。生命は、昼夜を分かたず、活動を続けている。フッサールによれば、生命の活動は、常に新たな生命の脈動の統一であるが(Vgl. Hua XXXIII, 69)、生命と意識を重ね合わせることによって、彼は、意識流のうちに、不断に自己を展開する生命と同様の働きを認めている。不断に自己を構成し続ける意識流は、自我の意識活動を支える究極の次元なのである。しかし、注意しなければならないが、それ自身の流れを構成する意識流が常に先行しつつ、自我の意識活動を支えるというように両者を分けて考えるべきではない。前者は後者の活動内容に影響するだけでなく、その内容を自らの流れに受容しながら、次の活動内容にさらに影響していくのである。したがって、意識流は刻々とおのれの流れを以前とは異なるものしながら、先にも述べたように成長し続けること止めないのである。

そうした意識流が自我に及ぼす影響力を示す重要な概念の一つが「動機づけの力」(Hua XXXIII, 377)である。動機づけるのは、意識流に内在するもの、かつての経験の沈澱物であり、動機づけられるのは自我である。自我の作用が開始されるいかなる場合にも、意識流に内在するものがそれを促すように働いている。フッサールは、「プロセスは単にプロセスであるにとどまらず、プロセスの意識である」(Hua XXXIII, 368)と述べた後で、「そこにはプロセスのスタイルをあらかじめ示す必然的で、予想的な動機づけが、意識の必然的な原形式として属している」(Hua XXXIII, 369)と述べている。すなわち、意識の志向的な働きが生じる際には、すでにそこに動機づけの働きが関与しているのである。

過去の暗闇から浮上して自我に働きかける現象である「刺激」という概念も、意識流において生起する意識の自発性を示している。「以前に知覚されたものは、暗闇から刺激をもたらす」(Hua XXXIII, 367)。暗闇からの刺激は、「立ち昇ってくる *empfortauchen*」(Hua XXXIII, 366)、「浮かび上がる *auf tauchen*」(Hua XXXIII, 366)という動詞でも示されるが、自我の現在に働きかけることを止めない。フッサールは、この働きを「根源的な志向の地平に属する様態」(Hua XXXIII, 363)と見なしている。それは、自我が作用を遂行する場合であれ、自我が睡眠中であれ、自我に内側から影響するのである。その影響の下に可能になるのが、自我の受動的な想起であり、この場面では、自我は意識流に潜在する自発性に促されて想起へと向かわされるのである。フッサールはまた、「刺激」と類似の概念として「触発」という概念も用いて、自我がそれに先行している時間流によって触発されて対象に向かう側面も考察している(Vgl. Hua XXXIII, 279)「感性的衝動は自我に対する触発であり、自我が受動的に引っ張られていることである」(Hua XXXIII, 276)<sup>10</sup>。

<sup>10</sup> フッサールの触発概念は、メンシュも前掲論文で「触発内容への自我の依存」という言い方で指摘しているように、対象構成的な自我ではなく、意識流によって「構成」される自我につながる。意識流の自己構成に従属するこの自我は、情念に攪乱される自我と同様に脆弱で、崩れやすい。この自我に関する実りある検討のためには、身体の問題を視野に入れる必要があるし、フッサールとフロイトの比較考察もまた必要であろう (Cf. J.R.Mensch, *op. cit.*, p.50.)。

以上で述べたように、『ベルナウ時間意識草稿』では、『内的時間意識の現象学』において強調されていた意識の根源的自発性が流れの自己意識論に継承され、意識が流れの中で自らを意識しながら、自らの流れを構成する現象が執拗に反省されている。またそれと相関的に、自我の受動性にも注意が払われている。しかし、この草稿の特徴は、意識流が主題化され、その志向的自己統一の過程、能動的自己構成の過程が反省される点に尽きるものではない。もう一つの重要な特徴として指摘すべきは、意識流の意識という問題が幾度となく考察され、それに伴って、反省する自我の能動的な働きに焦点が移り、意識の流れはその反省の元で受動的に経過する流れとして把握されるという側面である。さらに、反省以前に流れる原プロセスが無意識のプロセスか否かという問いとともに、無意識の次元の有無に関する問題が登場してくる。そこで次に、こうした点を、「意識の流れと流れの意識」という問題に即して検討してみたい。

### 3 意識の流れから流れの意識へ

#### —意識の自発性・意識の受動性と無意識—

意識の流れと流れの意識に関する問題は、この草稿で初めて現れたものではない。すでに『内的時間意識の現象学』でも「諸感覚の継続と継続の感覚とは同じではない」(Hua X, 12)、「継続の知覚は知覚の継続を前提している」(Hua X, 189ff)といった表現の内に、意識の流れと流れの意識に関する反省の萌芽が認められるが、それが『ベルナウ時間意識草稿』では明確に主題化されるのである。そこでは、「いかにして意識の継続が継続の意識になるのか」(Hua XXXIII, 96)、「継続の意識はいかにして可能か」(Hua XXXIII, 97)「生き生きした流れの意識について何を語るができるのか」(Hua XXXIII, 47)といった問いが繰り返されるが、この問題の中心は、既に2で述べたような、流れが自らの流れを意識する「流れの自己意識」ではなく、「流れることの意識」(Hua XXXIII, 90)である。すなわち、流れるという事態をいかに反省するかということである。意識の流れに関する反省においては、意識の流れの自己意識と自己統一が主題化されていたとすれば、流れの反省においては、流れをどのような仕方で、どの程度まで反省できるか、あるいはできないかが問題になる。流れの反省の不可能性とは、流れの反省そのものが流れである以上、流れを反省する反省は無限遡行に陥って、ついには流れを把握できないということである。この問題と関連して、流れの意識から、流れの意識を意識する意識への移行に伴う無限遡行の問題<sup>11</sup>や、流れを反省する自我の視線に関する問題などが繰り返し出現することになるが、とりわけ注目すべき点は、流れに注意の視線を向ける自我とその能動的働きが重要な位置を占めることによって、反省される流れの方が受動的な過程とし

<sup>11</sup> フッサリアーナ第33巻の編者も述べているように、フッサールは何種類かの無限遡行を反省の俎上にあげている。その問題との悪戦苦闘の内にフッサールの繊細な反省が遺憾なく発揮されている。その軌跡は、編者の言葉を借りれば「微視的な記述」として残されており、その問題については機会を改めて考察したい (Vgl. *Husserliana* Band XXXIII, SS.XXXVIII—XLIV.)。



て把握される傾向が強まってくるということである。現在を起点とする意識の出来事が、反省的意識の下で主題化されるのである。それと並んで、意識の流れは反省される過程と反省以前の過程とに区別され、後者が無意識の過程として把握されるのである。とはいえ、これらの問題は、『ベルナウ時間意識草稿』では断片的に記述されているのみで、後に『受動的総合の分析』の中で詳しく検討されることになるが、まずは意識の受動性に関する問題を検討してみたい。

受動性の問題を考える前に、まず、フッサールが意識の流れをどのように記述しているかを手短かに見ておきたい。その場合に忘れてならないのは、現に起きる意識の出来事は、究極の次元としての根源的に自己を構成する意識流の中で可能になるということである。「現象的時間、第一段階の超越論的時間は、第二段階の最も内的な超越論的時間を通じてのみ可能であり、無限のプロセスそのものである、究極の超越論的出来事においてのみ可能であり、そのプロセスはそれ自身がプロセスの意識なのである」(Hua XXXIII, 29)。ここに明確に語られているのは、既に2で述べたように、それ自身を意識しつつ流れる根源的なプロセスが先行しており、それゆえにこそ意識の出来事が可能になるということである。フッサールは端的に次のようにも述べている。「われわれは常に無限のプロセスの中心に位置している・・・」(Hua XXXIII, 28)。その中心から、意識の二重の流れが取り出されている。その一方は上方のプロセスであり、充実化のプロセスである。他方は、下方のプロセスであり、脱充実化のプロセスである。フッサールによれば、両者は、未来と過去という対立する方向に無限に進む「永遠のプロセス、停止することのないプロセス」(Hua XXXIII, 31)である。しかし言うまでもなく、両者の流れは分離しているのではなく、彼が繰り返し強調するように、融合し一体となって流れている。しかしながら、融合—統一的な意識の流れの確認にとどまらず、その流れを二つのプロセスに分解して、その行方を追跡することを止めない点に、フッサールの思索の特徴がある。

そうした二つのプロセスのなかで、フッサールが受動性の現象を記述するのは、下方のプロセスである。彼は、例えば次のように指摘している。「必然的な音の後退の受動性において生起することを常に考察することがとりわけ重要である」(Hua XIII, 68)。その過程は、「受動的な所与性」(Hua XXXIII, 69)として把握されている。受動的という言い方によって示されるのは、意識の自発的で根源的な流れにおいて生起する現象は、すべておのずと経過し、現在から過去へと変様していくことである。自我はこの変様の過程に決して関与できない。フッサールは、こうした変様過程の生起を「おのずから von selbst」(Hua XXXIII, 367, 368)という言い方で示し、現に生起する出来事が次第に現在から後退し、過去へと沈下する過程が、受動的に、おのずと起こることを確認している。新たな原印象が出現する現在は生き生きした原時間化の過程であるとすれば、「根源的に産出されたものは、固有な生動性をなくして沈下していく」(Hua XXXIII, 70)。その場合に、沈下していく過程で生動性が失われる様態は「死んだ」という形容詞で表わされてさえいる(Vgl. Hua XXXIII, 70)<sup>12</sup>。現在は常に「生き生きした持続、生き生きした生成」(Hua XXXIII, 137)であ

<sup>12</sup> 「死んだもの」という言い方は、『内的時間意識の現象学』にも見られる (Vgl. *Husserliana*

るが、そこにおいて登場したものは、すべて現在から後退することを余儀なくされるのである。流れさる、消えゆく、音が次第に弱まっていく、沈下するといった動詞は、すべて、おのずと経過するプロセスを示している。しかし、そのようにして経過したプロセスが「死んだ」と形容されるとしても、それは現在のプロセスの生き生きとした特徴と比較してのことにすぎない。実際には、経過したものは新たな現在と有機的に結びつくのであり、その意味で「死んだものは」実は死んではおらず、ある意味では生き生きしていることを忘れてはならない。とはいえ、現在の生動性が失われていくプロセスは、おのずと生起することは否定できず、フッサールはその点に、受動性を認めるのである。

フッサールは、こうしたおのずと経過する受動性の現象を、特に自我の想起に働きと関連づけている。テキスト22の第2節「想起の充実化のプロセスにおける、不明晰性と未規定性の様々な種類。想起における受動的な歩みと積極的な歩み」がその一例である。「想起の眼」(Hua XXXIII, 382)の前で繰り返される「想起の像」(Hua XXXIII, 382)を記述するこの節で、フッサールは自我が積極的に想起する側面と並んで、「想起の受動性」を問題にしている。「想起は想起の受動性でありうるし、想起は思いつきとして生じうる……」(Hua XXXIII, 383)。過ぎ去った出来事を積極的に想起するのではなく、不意に何かは想起されるのは馴染みの経験である。この経験は、意識流に沈澱したものが「みずから」自我の現在に浮上するというように理解すれば、意識の根源的自発性、意識流の自己構成とみなすことも可能であろう。しかし、フッサールは想起に関しては、意識流の自己構成に言及するよりも、想起の受動性という現象に注目している。想起する自我を中心にして想起の現象が語られ、自我の能動的想起と対比して、自我の受動的な想起が語られるからである。自我の能動性の働きは自我の自由に属するが、自我に到来するものは、自我の意のままにならない受動性の現象として位置づけられるのである。受動性の現象とは、言い換えれば、自我の意識が届かない仕方で生起するということであり、この生起が無意識の問題と結びつくのであり、この点を次に考察してみたい。

無意識の問題が断片的であれ論じられるのは、特に10番のテキストの第5節と第6節と補足の5である。「非時間的で、無意識的な原体験が存在するであろうか」(Hua XXXIII,195)という問いとともに始まる第5節と、「時間性の構成は非時間的で無意識的な原プロセスの後からの把握であるという仮説のさらなる究明」(Hua XXXIII, 200)と題する第6節で、フッサールが問うているのは、流れの意識、すなわち反省が生ずる以前の原プロセスの身分である。流れの意識は意識の経過の諸相を把握するが、その働きによって対象化される以前の意識の流れはいかなる流れなのかという問いである。この問いに対して、フッサールは、ヒュレー的契機からなる原プロセスも含めて無意識的なプロセスがあるのでは、あるいはあるはずだといった疑問形や仮説の形でしか答えていない(Vgl. Hua XXXIII, 200f)。言うまでもな

---

Band X, S.24.)。フッサール現象学は、言わば生と死（現在と失われた現在=過去）の交錯模様の記述という側面をもつ。現在の死とその再生の絡み合いの出来事に関するフッサールの記述は、生き生きとした現在の光=知覚と闇=無意識の問題に結びつくものである。

く、無意識の過程をそれとして認めることは無意識の過程の否認につながるからである。しかし驚くべきことに、フッサールはある箇所で、疑問形や仮説形を追い払うようにして次のような根本法則を述べている。「あらゆる感覚すること、あらゆる統握すること、すべてのヒュレー的なものとノエマ的なものは、究極的にはもろもろの無意識的なプロセスの継起であり、それにもとづいて統覚が可能になり、それによって継起と持続する諸対象の意識が可能になるのである」(Hua XXXIII, 201)。ここでフッサールが強調しているのは、意識の流れそのものは、流れの意識とは異なり、意識されない、すなわち無意識的な流れであり、意識のあらゆる作用そのものの出現も、反省される作用と異なり、反省以前に、気づかれない仕方で生起しているということである。遅れて気づくあるいは注意する反省の働きは、すでに経過した流れの後追いでしかなく、現に生起する流れや作用そのものは、意識化されえない無意識の原プロセスなのである。周知のように、この問題は特に C 草稿でフッサールが取り組んだ「生き生きした現在」に関する反省の問題に直結するものであるが、『ベルナウ時間意識草稿』で特徴的な事態として確認できるのは、意識流に関する相反する見方が随所に垣間見える点である。既に述べたように、フッサールは一方では、意識流のうちにすべてを知るような流れの自己意識、おのれの流れのすべてを見通すような意識の働きを認めているが、他方で、自我に知られることなく経過する受動性の現象と、自我の反省以前に流れる原プロセスを無意識的な流れとに注目しているのである。フッサールは、意識流のうちに、二重の意味で捉えることのできる「von selbst」という事態を注視していると言ってもよいかもしれない。すなわち、「自ら自発的に、能動的に」という側面と、「おのずから、受動的に」という側面がともに注視されているのである。前者の意識の自発性、能動性に関しては、既に先に述べたように、フッサールは、現在の意識あるいは現在はすべてを知る意識だと述べており、他方、自我の意識に気づかれることなく流れる現在は無意識的なプロセスであると述べている。一方が、言わば明るい現在であるとすれば、後者は暗い現在であり、闇の現在である。フッサールがここで意味している無意識は、フロイト的な意味での、深層の隠された、意識されない次元の無意識をさすのではない。あるいはまた、『受動的総合の分析』においてしばしば問われる、沈黙して空虚な表象と化し、意識されなくなる次元としての無意識を指すのでもない。それは、現に生き生きと進行するプロセスの気づかれない、無意識的な特徴を示しているのである。ここで問題となっている、自分自身についても、自分が志向するものについてもすべてを知る意識活動としての現在と、知られることなく経過する無意識的なプロセスとしての現在との両義性をどのように理解すべきであろうか。フッサール自身は、「反省的把握」(Hua XXXIII, 222)以前に、「根源的な仕方では時間を構成するプロセス、「根源的な連続的継起」(Hua XXXIII, 222)、端的に言えば、根源的な、時間構成的な意識流を究極の次元とみなしている。この次元を、フッサールは、「究極の超越論的出来事」(Hua XXXIII, 29)、「究極の意識流」(Hua XXXIII, 163)、「自己自身を(流れ)として構成するもの」(Hua XXXIII, 163)などとも言い換えるが、こうした意識流の根源的な自己構成は、内在的時間対象の構成がそこで可能となるような次元に他ならない。自我の反省は、既に述べたように、その流れのなかで、常に後

から可能になるものである。しかも、反省は流れの経過位相の一部を把握しうるのみであり、反省以前も以後も流れ続ける流れそのものを捉えることはできず、それが意識流の無意識的な側面として把握されているのである。

上に述べたように、究極の自己構成的意識流は、それ自身が再度構成されることもなく、反省的に意識されることができないという意味で無意識の流れであるということ、さらにまた、「根源的な連続的継起」として生起する流れの意識も、それ自身は意識されず、その意味で無意識的な流れであるということは、生き生きした現在の中心に「知られざるもの」がひそみ、自我はそれによって不断に自分の気づかない次元で影響され続けているということに他ならない。自我にとっての生き生きした現在は「暗いもの」であり、それゆえに自我はおのれの行方を見定めがたい。この種の見定めがたさが自我に固有のものとして属しているのである。しかし他方では、根源的な時間構成的な意識流は、フッサールの言うように、その流れの現在において、同時に過去も未来も見通している「明るいもの」である。このようにして、意識の流れと流れの意識が主題化される場面では、生き生きした現在の受動的な経過性格と無意識の暗さが浮き彫りにされ、意識の流れの根源的な自己構成の過程が反省される場合には、おのれの流れを比類ない仕方で統一する意識の明るさ、能動性が強調されることになる。

しかし、既に触れたように、『ベルナウ時間意識草稿』に見られる意識の能動的自発性を強調する側面は、自我の問題の展開に伴い後退し、それに代わって自我の時間構成と能動性を強調する側面が際立ってくる。また、それと対比的に考察される受動性への視点は、『受動的総合の分析』の中でさらに強化されていくことになる。そうした側面を考慮した場合に、『ベルナウ時間意識草稿』では、とりわけ意識に関する自発性と受動性という視点が分岐する光景を顕著に見て取ることができる。しかし、『内的時間意識の現象学』との関連で言えば、『ベルナウ時間意識草稿』には意識の自発性への強調の継続が明らかでもある。「時間意識の驚異」とは、まさしく意識が自らを自発的に、自在に繰り広げるプロセスへのフッサールの驚嘆を示したものといえよう。